

コロナ禍におけるウェブ検索とヘルスリテラシー

—パンデミック時のフェイク情報対策に向けて—

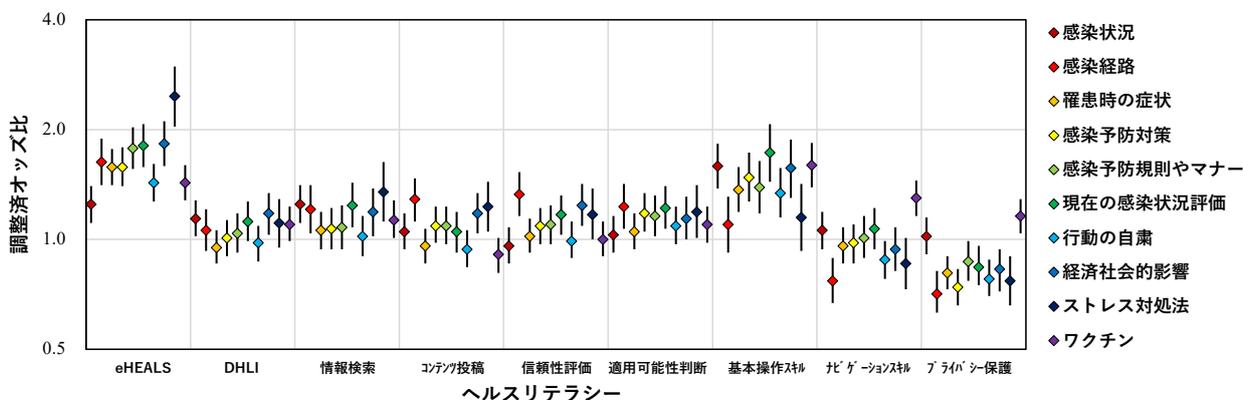
概要

光武誠吾 東京都健康長寿医療センター研究所研究員、岡浩一朗 早稲田大学スポーツ科学学術院教授、石崎達郎 医学研究科非常勤講師、中山健夫 同教授、高橋由光 同准教授らの研究グループは、コロナ禍における健康情報のウェブ検索と eヘルスリテラシーの関連性、そしてウェブ検索時に直面した課題について明らかにしました。

コロナ禍では、誤情報の拡散によるインフォデミックが深刻な問題となりましたが、正しい情報を得るためのウェブ検索の難しさや、それが eヘルスリテラシーとどのように関連するかは不明でした。本研究では、2021年10月に日本のインターネット利用者 6,000名を対象に調査を実施しました。高い eヘルスリテラシーを持つ参加者は多様な情報源を利用する傾向がありました。しかし、ナビゲーションやプライバシー保護のスキルが高い参加者は、慎重に情報を利用していました。半数の参加者（47%）は、情報検索に困難を感じていました。「情報の質と信頼性」、「必要な情報の過不足」、「公共機関等への不信感や疑念」、「コロナ関連情報の信頼性」の面で、情報検索の難しさを抱えていました。この研究は、パンデミック時の健康分野におけるフェイク情報対策に向けての第一歩になると考えられます。

本研究成果は、2024年7月11日に、国際学術誌「*Journal of Medical Internet Research*」にオンライン掲載されました。

ウェブの検索内容とヘルスリテラシー



ウェブ検索した10種類の検索内容（感染状況など）と、ヘルスリテラシーの関連を調べました。ヘルスリテラシーは、ウェブ1.0のヘルスリテラシー尺度 eHEALS と、ウェブ2.0のヘルスリテラシー尺度 DHLI と、DHLIの下位尺度7つ（情報探索リテラシーなど）で測定しました。eHEALSが高いほど、全ての検索内容をより検索しているのに対し、DHLIでは関連が見られませんでした。プライバシー保護リテラシーが高いほど検索をしていませんでした。

1. 背景

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）のパンデミック中、インターネットを通じて多くの誤情報や偽情報が急速に拡散し、深刻な公衆衛生上の問題を引き起こしました。これらは、「インフォデミック」[1]とよばれています。インターネット上の健康情報を適切に収集し、理解・活用し、適用するために eヘルスリテラシー [2] の必要性が強調されています。その一方で、eヘルスリテラシーの低いインターネットユーザーと高いユーザーの間で、COVID-19 情報の検索と利用の難しさを比較した研究はほとんどありませんでした。

2. 研究手法・成果

2021年10月に、日本のインターネットユーザー6,000名を対象にインターネット調査を実施しました。ヘルスリテラシーを測定するために eヘルスリテラシースケール (eHEALS) [3] と、デジタルヘルスリテラシー評価ツール COVID-19 パンデミック版 (DHLI) [4] を使用しました。インターネットの健康情報探索行動は、検索したウェブ情報源 (10項目) と、参加者が新型コロナウイルス感染症に関して検索したトピック (10項目) で評価しました。さらに、コロナに関するインターネットの情報探索と利用において困ったことについて自由回答を得ました。高い eヘルスリテラシーを持つ参加者は多様な情報源を利用する傾向がありましたが、ナビゲーションやプライバシー保護のスキルが高い参加者は慎重に情報を利用していました。半数の参加者 (47%) は、情報検索に困難を感じていました。難しさを感じた人と eHEALS の関連性はみられなかったのですが、DHLI が高いほど困っている人の割合が減りました。彼らは、「情報の質と信頼性」、「必要な情報の過不足」、「公共機関等への不信感や疑念」、「コロナ関連情報の信頼性」の面で、情報検索の難しさを抱えていました。「プライバシーとセキュリティへの懸念」、「情報検索の課題」、「不安とパニック」、「行動制限」など、より具体的な懸念も示していました。

3. 波及効果、今後の予定

新たな感染症拡大の危機に備える「新型インフルエンザ等対策政府行動計画」が令和6年7月2日に全面改定されましたが、同時に、次なるインフォデミック対策も不可欠です。「正しい情報」をつくり、つたえていくことは大切ですが、同時に、一般の方が、「インフォデミック」において何に困ったのか、情報ニーズは何かを明らかにすることも大切です。信頼性のある高い質の情報を必要なときに過不足なく提供すること、平常時より各公的機関が情報提供機関として市民からも信頼を得ていくことが求められます。同時に、プライバシー保護、パニックへの対応、自由と規制のバランスなども、考えていかなければなりません。インフォデミックにおけるウェブ情報検索の課題を体系化し、次なるインフォデミックに備えて情報提供のあり方を検討する必要があります。

4. 研究プロジェクトについて

高橋由光(研究代表者). 生活困窮者の健康・自立支援のためのビッグデータ基盤整備：健康格差是正をめざして. 日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(B) 20H01594. 2020-23年度.

<用語解説>

[1] インフォデミック (infodemic) : 情報 (information) と世界的/地域的流行 (pandemic/epidemic) をあわせた造語。病気の流行期間中に、実社会およびインターネット上において正しい情報とともに誤情報や偽情報が溢れかえってしまい、人々の健康状態が脅かされる危険性がある。

[2] eヘルスリテラシー：健康や医療に関する正しい情報を探し、理解し、活用する能力は「ヘルスリテラシー」とよばれています。特にインターネット上の健康や医療に関するヘルスリテラシーについては、eヘルスリテラシー、または、デジタルヘルスリテラシーと呼ばれています。

[3] eヘルスリテラシースケール (eHEALS)：Web 1.0 のeヘルスリテラシーを評価。

[4] デジタルヘルスリテラシー評価ツール COVID-19 パンデミック版 (DHLI)：デジタルヘルスリテラシー評価ツール COVID-19 パンデミック版の総合点で Web 2.0 のeヘルスリテラシーを評価。

<研究者のコメント>

科学的根拠に基づいた医療 (EBM) が重要視されており、エビデンスは予防や治療を選択する際の重要な情報源となっています。しかし、コロナ禍、特に初期においては、情報がソーシャルメディア等を通して次々と更新される状況で、「正しい情報」がわからなくなりました。ヘルスリテラシーは、健康情報を理解し利用する能力にとどまらず、各個人やコミュニティにとって重要なアセット (資産) としての側面があります。ヘルスリテラシーは健康の社会的決定要因であり、情報は健康の決定要因とみなされています。次なるインフォデミックに備え、個人のみならず、社会としてのeヘルスリテラシーの向上および情報提供のあり方について、議論、整備していかなければならないと考えています。

<論文タイトルと著者>

タイトル：eHealth Literacy and Web-Based Health Information-Seeking Behaviors on COVID-19 in Japan: Internet-Based Mixed Methods Study

日本におけるeヘルスリテラシーとインターネット上のコロナ関連健康情報探索行動：インターネット調査を用いたミックスドメソッズ研究

著者：Seigo Mitsutake, Koichiro Oka, Orkan Okan, Kevin Dadaczynski, Tatsuro Ishizaki, Takeo Nakayama, Yoshimitsu Takahashi.

光武誠吾、岡浩一郎、オルカン・オカン、ケビン・ダダチンスキー、石崎達郎、中山健夫、高橋由光

掲載誌：Journal of Medical Internet Research 2024;26:e57842

DOI：10.2196/57842

<参考図表>

図 1-1 情報源とヘルスリテラシー

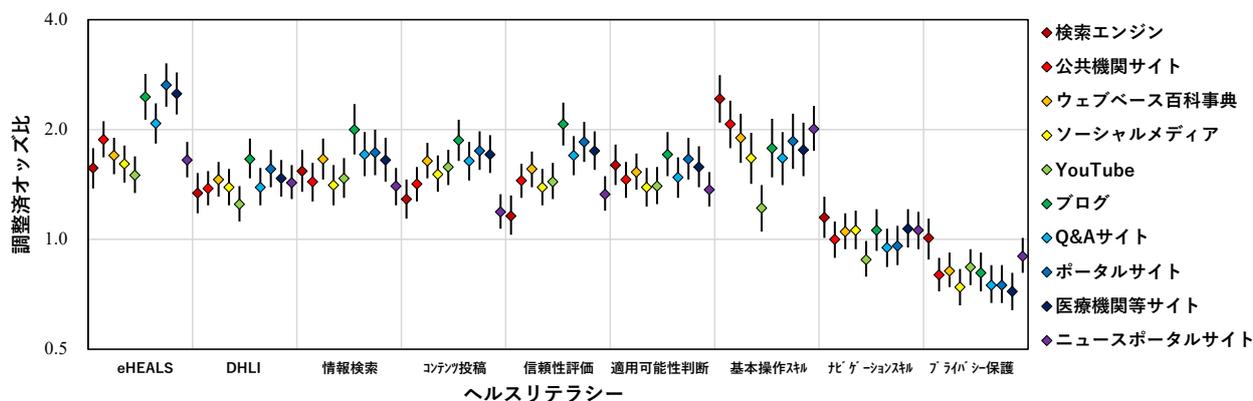
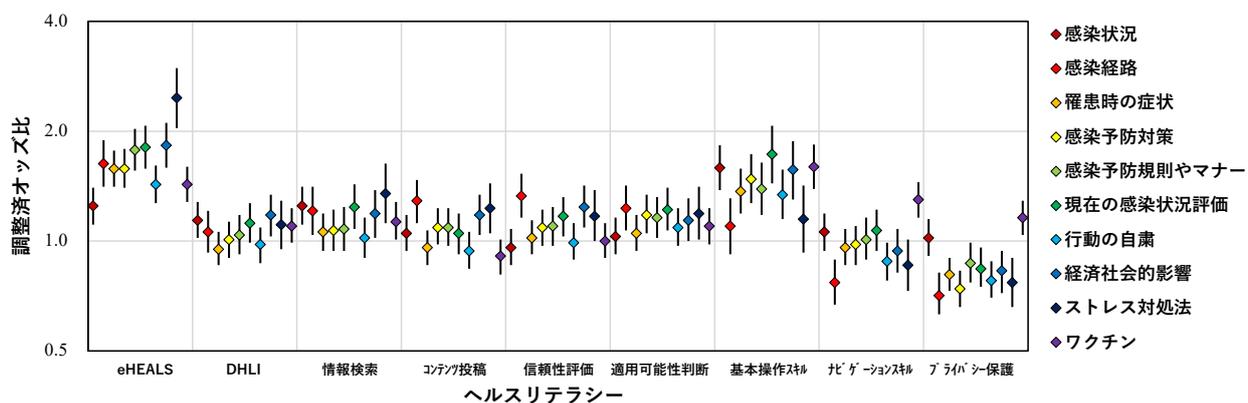


図 1-2 検索内容とヘルスリテラシー



eHEALS : eヘルスリテラシースケール。

DHLI : デジタルヘルスリテラシー評価ツール COVID-19 パンデミック版の総合点。以下の 7 下位尺度より構成される。情報検索、コンテンツ投稿、信頼性評価、適用可能性判断、基本操作スキル、ナビゲーションスキル、プライバシー保護。

